

ビハーラ活動と臨床宗教師研修の歴史と意義—親鸞教学を礎にして

鍋島直樹（龍谷大学）

愛するものを失くし、自己を喪失していく悲しみの中で、「なぜこのような目に遭うのか」「生きる意味はどこに」と人は蹲る。臨床宗教師研修は、人々の悲しみや無念さに寄り添いつづけた宗教者の伝統と臨床経験から、二〇一二年、東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座に誕生した。二〇一四年、龍谷大学大学院実践真宗学研究科でもその臨床宗教教育を始めた。臨床宗教師は、日本版チャプレンであり、岡部健医師が提唱した。臨床宗教師（interfaith chaplain）とは、病院、社会福祉施設、被災地などの公共空間で、布教や宗教勧誘を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰を尊重し、生きる力を育む宗教者である。医療、社会福祉の専門職とチームを組み、宗教者として全存在をかけて、人々の苦悩や悲歎に向きあい、かけがえのない物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行う。臨床宗教師の呼称は、仏教のビハーラ僧やキリスト教のチャプレンを包み込む。宗教宗派を超えて宗教者が協力する願いがそこに込められている。

臨床宗教師研修の誕生には、二つの背景がある。一つは、1995年の阪神淡路大震災以降、2011年の東日本大震災において、宗教者が被災地に赴き、被災者に必要な支援を行ってきたことである。宗教者は物資の避難所への搬送、炊き出し、追悼法要、被災家屋に流入した土砂の撤去、家具の片づけ、遺族や被災者へのグリーフケア、避難所や仮設住宅でのお茶会、被災者の傾聴活動をつづけ、時には異なる宗教者間で協力しあった。支えようとする宗教者も被災者に人生の意味を教えられた。もう一つは、1985年以来つづいてきた、医療と社会福祉と仏教のチームワークによって患者と家族を全人的に支援するビハーラ活動である。「ビハーラ（vihāra）」とは、中村元の「ビハーラ活動の源流」によれば、「くつろいでとどまること」を原意とする。一九八五年、田宮仁は、「仏教を背景としたターミナル・ケア（終末期医療）施設」の呼称として「ビハーラ」を提唱した。一九九二年に設立された長岡西病院ビハーラ病棟には仏堂がある。宗派を超えて僧侶が協力し、ビハーラ僧が勤行と法話を行い、患者の気持に寄り添う。ビハーラ僧は、患者にとって心の屑籠のような存在である。また、一九八六年に浄土真宗本願寺派ビハーラ活動研究会が発足し、翌年、ビハーラ活動者養成研修が始まった。二〇〇八年設立のあそかビハーラ病院は、仏教の縁起的生命観、仏の摂取不捨の悲願を依りどころとし、患者が願われないのちを完遂できるように、「ぬくもりとおかげさま」の心で、安らぎの医療を実践している。宗教者が相手を尊重できるのは、自らの依りどころが確かであるからである。浄土教を機軸とし、心のケアを実践する宗教者自身の依りどころには、尊卑賢愚に拘わらず、一切衆生が仏に願われているという阿弥陀仏の本願がある。生死を超えて浄土に共に往生してまた会えるという死生観がある。無力な自己が、如来の大悲にいだかれて、自らの覚悟で精一杯できることをする。そうした大悲に抱かれた患者の実践である。